町民文芸

只見短歌会　十月詠草

大塚栄一　指導

わが庭の金木犀が遠くまで匂ふと人ら声かけくるる　古川英子

孫の婚儀に二世も共に披露なし祝ひ重なり式場華やぐ　吉津政枝

木の陰のわれに気付かず手入れせぬ松をそしりて知り人帰る　皆川恒子

亡き夫に松茸ご飯と思へども熊が出るとふ山には行けず　五十嵐英子

休耕田に雑草繁り秋風に揺るるを農婦のわれは哀しむ　馬場八智

異状気象か実入り揃はぬ豆小豆の青きを残し乾びしを抜く　渡部ゆき子

師のけなす言葉に夫人は微笑みて歌会の我らを和ませくるる　五十嵐夏美

とぼとぼと歩み続けし夫婦道八十過ぎて振り返りみつ　齊藤ちひろ

近山に雪降りたれば合図のごと家の周りを人等は片す　目黒富子

残飯を畑に捨てれば野良猫は豆木の陰で我が去るを待つ　渡部ヨリ子

鉢棚のくちなし二つ返り咲き秋深まりし裏庭に映ゆ　新国洋子

（出詠順）

只見俳句会　十一月例会

目黒十一　指導

コスモスや久しき友の訪ね来て　康女

いつの間に長湯となりし秋の雨　一穂

秋茄子や艶を落として笊の中　洋子

秋冷やぬか焼く煙ゆれもせず　照り栄えて葡萄紅葉の昇りゆく　敦子

むずかしき事もなく散る柿落葉　夕暮るる小学校や鳥渡る　熊出ると広報無線告げる秋　礼

溝蕎麦や小堀めぐらすからむし館　湧き水に手の平浸す草紅葉　修一

萩の花落ち尽したる阿弥陀堂　ゆったりと真鯉向き変え秋の暮　一灯

葡萄棚熊が来ようと通さんぞ　秋射会手ぐすね引いて控えけり　又壱歩

葉を刻みいるや厨の夕ちちろ　講義録曝し若さの蘇り　邦男

介護弁当昼にいただき薄紅葉　水道の水漏れ探す秋の空　恒夫

放たれし鶏の一歩や冬に入る　立冬や一人しずかに誕生日　吉児

老体の夜半に覚めいて冬の雷　捨てしまま山路をふさぐ月夜茸　隆堂

大舞茸柴ねじかけて荷送りす　爽涼や握手で終わる延長戦　笑羊

突っ掛けの足湿りおり星月夜　赤南瓜ひとり昼餉を豊にす　リウコ

一山を越えれば越後ひつじ田に　里芋の百株を掘る大仕事